シンポジウム・巡観報告

二〇一三年度

シンポジウム「四国の地域社会と交通」と巡観

はじめに

二〇一三年度のシンポジウムは「四国」という地域社会における交通史・商品流通史研究の現状を確認することを目的として、高知大学（朝倉キャンパス）において開催された。

近年、四国をめぐっては、二〇〇七年度に香川県高松市で開催された地方史研究連絡協議会第五十八回大会に代表されるように、四国多様性を前提としながら、その歴史をと外部の視点から一的に捉えなおす態度が生まれている。また、 Skywalker Carnafieldは、四国地域史研究組織間相互の連携強化の志気で進んでいる。本年度の本会場を用いたシンポジウムも、こうした流れを踏まえたものであるということを付記しておきたい。また、関連行事として、高知県東海岸地域をめぐる巡観を行った。その内容と成果を以下に報告する。

まず、本日、今村貴史（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）「四国遍路の道標について」愛媛の標石を中心に」は、愛媛県内の標石を中心に、四国遍路の道標について愛媛の標石を中心に。一つずつ研究報告をしていき、最後に共通討論をここなった。

二〇一三年度シンポジウムは、二〇三号の発生にともない低気圧により開催時に降雨があった影響が懸念されたものの、県の内外から三十三名の参加があった。プログラムは、まず丸山雍木会長によく開会挨拶、原淳一郎常任委員による「近年四国全体を視野に入れたさまざまな取り組みがおこなわれているなか、交通史でも四国における研究の現状と課題を確認すべき」というシンポジウムを開催したいという趣旨説明のち、四つの県から一国ずつ研究報告をしていき、最後に共通討論をここなった。

第二部、和田光男（高知県文化博物館専門学芸員）「四国の交通史とその研究の歴史」は、四国の交通史について研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明らかにしている。さらに、四国の交通史研究を進め、交通史の歴史を明ら
仕成の人たちが銀の拝借を返済が困難だとして忌避しようとしたものの、仲買人たちがその拝借を受け入れ続けたことも、高知県域のなかでは再評価しようとしたものである。江戸時代にあって東灘では、七世紀半ばで続く海路経由の参勤交代をつつじた政治的・軍事的システムの整備を出発点にしつつ、その時期以降は、商品流通・輸送の経済システムや交通システム、漂着異国船への対応をはじめとする外交システムなどの整備にもとづきながら発展していった。報告では、手経の堀湊（高知県香南市）を素材にしつつ、同じ時代のヨーロッパも同様に存在した種の湊がいかに土佐で成立したのかを考察した。土佐国内では、近世初期にかけて発展した土木技術に関連するものであると

以下、四報告に引き続き、共通討論に入れた。司会は本稿の文責者・鷹頭が担当した。
時代こそ近世期を中心にして統一したものの、それぞれの内容からすれば、総合的な議論を展開することは難しいと思っており、報告することに補足説明と質疑応答を進め、四県の関連性を見いだすことになった。実際の討論では、開催地高知県の歴史を取りあげた有村報告に対する質問やコメントが多かった。河村自身は翌日の巡視で手稿の堀川を模索する予定を踏まえた報告だったが、仁淀川で調査された河川の流れを、いわゆる「鎌倉一木の役」と「港湾沿いとは関連性を持つ」を結びつけて捉えるべきだと指摘するなど、四国交通路全体の問題に関わる議論も展開された。

このように、今回のシンポジウムでは、四国を一体的に捉えることの難しさを改めて実感したが、各県の研究者が一堂に集ってそれぞれの実証研究を踏まえながら相互に関連性を見つけることを意図した。また、司会者を務めた筆者としては、近世の瀬戸内海地域をめぐる四国と山陽のつながりをテーマとしてきた自身の研究歴を、共通討論の枠の中で議論の展開にあまり生かせなかったことは残念だった。次の機会の課題としてしたい。

二、巡視

六日（六月）の巡視は、昨日の昼間とはうって変わって陽射しがきつくなるほど晴れたり、十五名の参加者のともと観光バスを利用しておこなわれた。その行程は以下の通り。

午前九時、JR高知駅前出発→①手結港（香南市）、②岩崎弥太郎生家（安芸市）、③安芸市立歴史民俗資料館（同市）→④県中ふるさと館（同市）にて昼食→⑤今村邸中町から野良時計（同市）まで徒歩→⑥岡谷御殿前、石鎚山の西にある位置する第六十八番札所横峰寺（愛媛県四国）の歴史を念頭に置いた。四国通路の道標と石鎚信仰の広がりとの関連性を確認する質問に対して、「胡光氏、愛媛大学文学部の」という質問が、両者は区別すべきときのようで信仰の道モノを運ぶ道を分けて捉えるべきだと指摘するなど、四国の交通路全体の問題に関わる議論も展開された。

ただ、せっかく掲げたシンポジウムのテーマについて全体的な総括的な議論を展開させるだけの時間を十分とならなかったこと、また、司会者を務めた筆者としては、近世の瀬戸内海地域をめぐる四国と山陽のつながりをテーマとしてきた自身の研究歴を共通討論の枠の中で議論の展開にあまり生かせなかったことは残念だった。次の機会の課題としてしたい。
著者が持つもので、水深は干潮時に3m、満潮時は6mになるという。港を構成する石垣は異なる年代のものが積み重ねられているが、実際に船着き場まで下って、石垣のどの部分がどの時期のものと推定されるかまで説明している。

なお、近世史と関係しないが、回岡氏の解説が終わる前、水戸十時帳を参照して手稿港可動橋が動いて船が通れるよう橋が上がるように旅の思い出となった。

②は、土佐藩下流人（無籍無役となっ）の武士身分の一つであり、鹿児島の到着が早くなる前、手稿港可動橋が動いて船が通れるよう橋が上がるように旅の思い出となった。

③の資料館は元々、土佐藩の家族・五藤家の資料を収蔵する目的だったが、NHK大河ドラマ「龍馬伝」（昭和50年）の放送を機会に重篤義太郎関係の資料を併せて収めるようにになったという。館内では、安芸市立書道美術館学芸員の小林和香氏に解説をいただき、江戸時代における安芸市域の様子をうかがい知ることができる絵図史料等を閲覧させていただいた。

④では、参加者全員で昼食として郷土料理（かき揚げちりめん丼）を美味しくいただいた。

⑤については、小林氏からはまず最初に「土居郷中」という言葉の意味について説明を受けた。「土居」とは、元々は中世に生活した農民の居城で、「土居郷中」は、土佐国で最後に大型船が係留し、浜からはしのぎで材料などの荷物を輸送し、水運が盛んな時代を象徴するものである。安芸市域の展示では、戦国時代に土佐国東部で勢力を誇った安芸氏の居城「安芸城」の歴史を再現しており、安芸市域の歴史を深く理解するための資料館としての役割を果たしている。
手結港にて
委本間のを、荻企お、びなの回を、証別会のら協で、可論に、明解未か、し、って、えは、研、思、業、明、的史、るれと。

事務所の任常宏）

この仕バサ々と、さと巡たもし、りり。